

定價二〇〇円第十七回配本

昭和三年四月二十五日初版

世界大ロマン全集十七卷

黄金の仔牛 イリフ、ベトロフ

訳者上田進 うえだすすむ

発行者小林茂

印刷者中内佐光

發行所東京都新宿区新小川町一ノ六東京創元社

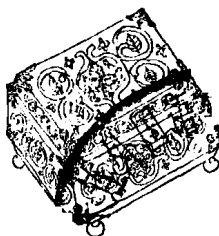
電話(33)八五二一(代表)一五
振替東京一五六五

印刷 臨・製本 鈴木
1937.4.
Printed in Japan

黄金の仔牛

イリフ，ペトロフ

上 田 進 訳



世界大ロマン全集

17

東京創元社

ЗОЛОТОЙ ТЕЛЕНОК

Илья Ильф и Евгений Петров

箱 絵

幸田 侑三

黄金の仔牛 目次

I 『かもしか号』の乗組員

パニコフスキイが協定をやぶること……………	七
シュミット少佐の息子が三十人……………	三〇
ガソリンはそっちで——計画はこっちで……………	三三
地下の王国……………	四〇
かもしか号……………	四五
ありがた迷惑の光榮……………	五二
チェルノモルスク……………	五九
親分と親分……………	六六
カラマゾフ兄弟からの電報……………	六九
ホームー、ミルトン、パニコフスキイ……………	七二
初対面……………	七五
角と蹄……………	七九
陸と海とで……………	八二
隊長タンゴを踊る……………	八五
いよいよオススタッフが馬を陣頭に進める……………	八八
第三十四号毒ガス避難所……………	九一

目

愛の日和	一六
三つの道	一九〇
孤立的存在	
特別列車の乗客	二〇四
資本家の雇人を仲間に入れてください	二五
汗だくの靈感の波	二六
アレクサンドル・イブン・イワノウイチ	二五七
バグダッド	二六六
すばらしい未来への門	二七四
青春の友	二七四
主婦や、家政婦や、寡婦や、女歯科医などに	
愛された	二九一
金羊毛勲章をつけた騎士	三〇四
あとがき	三二三

黄金の仔牛

登場人物

オスタップ・ベンデル 本編の主人公。三十三歳、

英雄シユミット少佐の遺児と自称する詐欺

師。リオ・デ・ジャネイロにあこがれてい

る。そこに定住する費用百万ルーブリを得

るため、コレイコを恐喝する。

バラガノフ(シューラ) オスタップの子分。シユ

ミット少佐の遺児と自称する詐欺師。

パニコフスキイ(ミハイル・サムエルウィチ) オ

スタップの子分。すり、シユミット少佐の

遺児と自称する詐欺師。

コズレウィチ(アダム・カジミロウィチ) アルバ

トフ町のタクシー運転手。

コレイコ(アレクサンドル・イワノウィチ) ヘルク

レス・コンツェルンの会計係。暗算の天才。

ポリイハエフ ヘルクレス・コンツェルンの長官。

ベルラガ ヘルクレス・コンツェルンの会計係。

ゾーシャ・シニツカヤ 二十歳。コレイコ、オスタッ

プに恋せられる。

フント老人 オスタップ経営の角蹄買入所所長。

エゴール・スクムブリエウィチ ヘルクレス・コンツ

ェルンの従業員。

I 『かもしか号』の乗組員

1 パニコフスキイが協定を

やぶること

足で歩く連中を大切にしなければならん。

この連中が、人類の大部分をしめている。しかも、そのもつとも優秀な部分をしめている。この連中が世界をつくったのだ。市街をつくったのも、高層建築をたてたのも、運河をひらいたのも、水道をひいたのも、街路を舗装したのも、町に電燈をつけたのも、この連中だ。世界じゅうに文化をひろめたのも、印刷術を発明したのも、火薬を発明したのも、川に橋をかけたのも、エジプトの象形文字を判読したのも、安全かみそりを使うようにしたのも、奴隷の売買をなくした

のも、ひとりの豆から百十四種ものおいしいご馳走をこしらえることができるようにしたのも、みんな、この、足で歩く連中だ。

こうしてすべてがととのい、地球がやや整頓を見せってきたときになって、こんどは自動車を取りまわす連中があらわれてきた。

ここで特に注意しておかなければならないことは、その自動車なるものが、やはりまた足で歩く連中によって発明されたものであるということだ。ところが自動車を取りまわす連中は、そんなことをてんから忘れてしまっている。そして、その足で歩く、おとなしい、かしこい連中は圧迫を受けはじめる。その連中の手で作られた街路は、自動車を取りまわす連中の支配下にうつってしまった。車道は二倍も三倍もひろくなり、人道はせいぜいたばこの箱ぐらいの幅にせまめられてしまった。そして、足で歩く連中はいつもびくびくして、家の壁ぎわにへばりついていなければならなくなつた。

大都会では、この連中はまるで殉教者のような生活を送っている。かれらのためには、一定の交通区域

がさだめられた。かれらはもう十字路でしか街路をよこぎることが許されないのである。しかも、この交差点というのは、人の動きがもつともはげしいところであり、めいめいの人の生命が、まさに累卵のあやうきにおかれてある場所なのだ。

足で歩く連中の考えによれば、人間や貨物を安全に運んで行くのが自動車の使命なのであるわけだが、このひろいわがロシアの国では、ふつうはもう自動車といえ、人殺し機械といってもいいような、恐ろしい性質をそなえているのである。それはいくたのすぐれた労働者やその家族たちを、どんどん戦列から引きぬいていってしまうのだ。

また、もしも歩行者が自動車にひっかけられた場合、万が一にも幸いにその車の銀色の鼻先からうまく身をかわしたとしても、——こんどは警察から、交通規則違反として、罰金をとられるのである。

なにしろもう足で歩く連中の権威というものは、すっかり地におちてしまったのだ。ホレーショ、ボイル、マリオット、ロバチエフスキ、グーテンベルグ、メイエルホリド、アナトール・フランスというう

うな、すぐれた人々を生み出したこの連中が、いまだはこの上なし愚劣な偶像の前にひざまずいて、やつのことでおのれの存在を認めてもらわなければならぬような、みじめなありさまになっているのだ。神よ、おお、神よ！ なぞと言ったって、そんなものは本当はありやしないんだが、まあいいや、とにかく神様よだ、おまえさんは、いったい、この連中をどこまで苦しめようというのだ！

そういう連中のひとり、ウラジオストックからシベリア国道をモスクワに向かって歩いて来る。片方の手には、『紡績職工の生活を改善しましょう』と書いた旗を持ち、片方の肩には棒をかついでいる。その杖のさきには、予備のわらじとふたのないブリキのやかんとが、ぶらんぶらんとぶらさがっている。このソヴェートのハイカーは、青年時代にウラジオストックを出発して、よぼよぼの老年になって、やっとモスクワの入口にたどりついたかと思うと、そこで、もう番号札もはつきり見えなくなったような古ぼけた自動手車にでもひかれてしまうであらう。

あるいはまたヨーロッパ式の徒歩旅行の最後の花を

咲かせようというのもある。そいつは、樽をころがしながら、世界じゅうを徒歩で歩きまわろうというのだ。樽なしで歩いて、そりゃかまわない。けれどそうになると、かれが実際に遠くから歩いてきたものだということを、だれも認めてくれないであらう、したがって新聞はかれのことを何も書きたててはくれないだろう。だから生涯、呪うべき樽をころがして行かなければならなくなるのだ、しかもその樽には、『運転手の夢』印のガソリンの品質優良なることをでかでかと広告している、黄色い大きなレットルがはりつけてあるのだ。じつにばかばかしい話ではないか！

足で歩く連中は、それほどにまでおちぶれてしまったのだ。

ところが、ロシアのいなかの小さな町々でだけは、いまだにまだ足で歩く連中が尊敬され、大切にされているのである。そこでは、まだその連中が街路の主人になっていて、なんの心配もなく大通りをさまよい歩き、好きなときに、好きな場所で、勝手な方向へ、街路をよこぎって行くことができるのだ。

公園の管理人や役所の小使などがよくかぶっている

白い日おおいをつけた帽子をかぶったひとりの紳士があらわれた。この人は、人類の大部分を占め、しかももつとも優秀な部分をなしている連中のひとりにちがいない。かれは、謙譲な好奇の目をかがやかせながら、アルバトフの町の通りを、徒歩で歩いて行った。手には、産婆がよく持って歩いていような、小さな手さげかばんを持っていた。しかし町はどうやら、こんな風がわりな帽子をかぶった通行人があらわれても、すこしもおどろきはしないらしかった。

かれは、空色やうす黄色やうす桃色をした、いくつもの鎧褌をながめた。アメリカ風に金をべたべた使った教会の円屋根も目にはいった。しかしその金は、だいぶんもうはげちよろになっている。役所の屋上には、旗がひるがえっていた。

いなか町の、白い塔のついた城門のわきで、ふたりのきつそうな老婆が、フランス語で語りあっていた。ソヴェート政府に不平をならべ、自分たちがかわいがっていた娘たちのことなぞを思いだしているのであった。教会の穴倉から、ヒヤリと冷たい風が吹いてきた、それといっしょに、ぶどう酒かなんかのよう甘い

ずっぱいにおいがもれてきた。ごらんのとおり、そこには馬鈴薯^{イモ}が貯蔵してあるのだ。

「馬鈴薯の上にたてる救世寺院か」——その紳士は低い声でつぶやいた。

「祝第五回地区婦人協議会」と石灰^{セメント}の汁で書いてあるま新しいベニヤ板のアーチが立っている。それをくぐると、かれは長い並木道のはしに立った。この遊歩道^{遊歩道}は『若き天才』通りという名がついている。

「いや、ちがう」かれはがっかりして言った。「これは、リオ・デ・ジャネイロじゃない。てんでお話にならない」

『若き天才』通りにならんでいるベンチは、ほとんど全部娘さんたちによって占領^{占領}されている。その娘さんたちはみんな同じように、腰かけて本をひらいているのであった。木の間^間をもれてくる陽光^{日光}が、本のページの上に、むきだしの肌の上に、感動的な前髪^{前髪}の上に、おちていた。紳士がそのすずしい並木道に足をふみ入れると、ベンチにいつせいに動揺^{動揺}がおこった。娘さんたちは、グラトコフや、エリザ・オルジュシコや、セイフリナなぞの本をとして、この通行の紳士におずお

ずしたまなざしをなげた。かれは読書に熱中している娘さんたちの前を、おごそかな足どりで通りすぎて、執行委員会^{執行委員会}の建物に近づいて行った。——そこがかれのめざす目的の地であった。

それから一分もたたないうちに、かれはもう執行委員長^{委員長}の部屋の扉^扉をノックしていた。

「だれですか、あなたは？」戸口にすえた卓にすわっていた書記が聞いた。「執行委員長のとこへ、何に來たんです？　どんな用事ですか？」

この訪問者は、どうやら、こういうお役所の書記なぞとの応対の要領をちゃんと心得ているらしかった。かれは急を要する公用で來たなぞというふうなことは、そぶりにも見せなかった。

「私用です」そっけなくそう言つて、かれは書記のほうには目もくれず、いきなり扉のすきまから中に首をつっこんだ。

「かまいませんか？」

そして、むこうの答えも待たずに、中へはいって、委員長^{委員長}のデスクのそばへ寄つて行つた。

「こんにちは！ あなたはぼくがおわかりになりませんか？」

執行委員長は黒い目をした、頭でっかちの人で、青い背広を着、同じ色のズボンをはいていた。そのズボスの裾は、歩きいように踵を高くした長靴の中に、おしこんである。かれはとつぜん飛びこんで来た訪問者を、しばらくぼんやりとながめていたが、どうもわからないと言った。

「おわかりになりませんか？ たいていの人は、ぼくがあんまりよくおやじに似ているといつて、びっくりするんですがね」

「わたしだって、やっぱりおやじに似てますよ」委員長はすこしいらいらして、言った。「それがどうしたんです、同志？」

「その場合にですね、おやじがどういう人間であるかということが大切なんだと思うんです」訪問者はちょっとはにかんで言った。「ぼくはシュミット少佐の息子なんです」

執行委員長はぎくりとして、思わず立ちあがってしまった。かれはあの黒海の英雄シュミット少佐の有名

な顔を、まざまざと思いだした。青白い顔で、獅子のついたブロンズのボタンでとめてある黒い首巻きをしていた。あの勇士の息子にたいして、どんな質問をしたらこの場合いちばんふさわしいかと、かれがあれこれと思いめぐらしているあいだに、訪問者のほうは、骨董屋に來たやかましいお客みたいな目つきで、部屋の家具調度をじろじろりと見まわしていた。

かつて帝政時代には、官庁の調度品といえは、はなはだ紋切形かぎぎょうのものときまっていた。いわばお役所式の家具ともいふべき、一種特別のものができあがっていたのだ。天井までとどくような、ごく月なみな戸棚とどろ、きれいにみがきあげられた厚さ三寸ぐらいの板でつくられた長い腰掛け、玉突台のような脚のついた卓、外部の木のさわがしい世界とお役所の中とを仕切っている檯たいの木の手すり、といったたぐいのものだ。ところが革命騒ぎのあいだに、この種の家具はほとんど姿をけしてしまい、おまけにそれを製造する秘訣までどこかに吹っこんでしまった。役人のおる場所はというふうに飾りつけたらいいかということ、人々はすっかり忘れてしまい、これまでは個人個人の家庭の生活とき

りはなすことができないと考えられていたような品物が、どしどし役所の中に姿をあらわしてきた。スプリングのついた、具合のいい安樂椅子や、幸運をもたらしてくれるといわれている七つの瀬戸物の象をかざっている、鏡つきの化粧卓が役所の中にあらわれ、食器棚や、本棚や、リユーマチ患者用の革張りの移動椅子や、日本の青磁の壺などが持ちこまれた。このアルバトフ町の執行委員会の委員長の部屋には、ふつうの書物卓のほかに、すりきれたバラ色の絹を張った、ふかふかの安樂椅子が二つと、縞の布を張った腰掛けが一つと、日本の富士山と満開の桜とを描いた襦子の衝立と、市場向きに雑な仕事をしてある、鏡のついたスラヴ風の衣裳だんすとが置いてあった。

『「やあ、これはみごとな！」式のものばかりだな』訪問者は心のうちで考えた。「たいしたもんじゃないよ。いや、やっぱりこれはリオ・デ・ジャネイロじゃないわ」

「よくおいでくださいました」やっと委員長が口をひらいた。「たしかモスクワからおいになったんで？」
「そうです、汽車で来ました」訪問者はそう答えなが

らも、なおも小さなソファなどをながめまわして、この執行委員会のあるところ具合はあまりよくないな、という確信をますますかためたのであった。かれはむしろこの執行委員会などは、レニングラードの木材トラストで作っている新しいスエーデン式の家具をそなえたほうがいいんだがなあ、などと考えていた。

執行委員長は、シュミット少佐の息子がアルバトフくんだりへなんの目的でできたのか、それを聞きたいと思っていたのだが、自分でもまるで思いがけなく、ふいにあわれっぽい微笑が浮かんできて、こんなことを言ってしまった。

「この町にはなかなかりっぱな教会がいくつもありましてね。先般も学芸監督局から調査のかたが見えられたところで、あなたはあの巡洋艦オチャコフ号の事件があったころのことをおぼえておいでですか？」

「いや、もうほんのぼんやりとしかおぼえていませんね」訪問者は答えた。「そのころはぼくはまだごく小さかったですからね。ほんの子供だったですよ」

「失礼ですが、あなたのお名まえはなんとおっしゃる

んで？」

「ニコライっていうんです……ニコライ・シュミットです」

「えーと、それじゃ、ご父称は？」

『さあて、まずいことになったぞ』と、訪問者はちょっと考えこんだ。なにしろ、かれ自身も実は自分の父親の名まえを知らないのであった。

「まったくねえ……」かれはわざと相手の質問をはぐらかして、もったいぶった調子で言いだした。「このごろではもう、むかしの勇士の名まえなんか知らない人が多いですね。新経済政策にばかり夢中になっていて、むかしの勇士のことになんか心をうごかす人はないんですよ。ところで、ぼくがこの町へおられたのはです、まったく偶然なんです。途中でひょんなめにあいましてね、一文なしになっちゃったんです」

執行委員長のほうでも、話題が転換されたことをたいへん喜んだ。というのは、あのオチャコフ号の英雄の名まえを忘れちまっていることは恥辱のいたりだと思っただけから。

『実際、仕事に追われていて、そんなどこじゃない』

と、かれは、頭の中に描きだしたあの勇士の顔をつくづくとながめながら、考えた。『偉大な英雄の名まえなんか、すっかり忘れちまっていたわい』

「なんですって？ 一文なしにおなりになったんですって？ そりゃまたおもしろいですな」

「むろんぼくは、個人商人のどこへ行くことだって知っています」訪問者は言った。「行けば、だれだってぼくに金を貸してくれますよ。しかしそんなことをするのは、政治的見地からみて、はなはだおもしろくないことだというのはおわかりでしょう。りっぱな勇士の息子が、いきなり個人商人やネップマンのところへ金を借りに行くなんて……」

シュミット少佐の息子は、おしまいの文句を中途でボツンと切ってしまった。委員長は相手の声の調子が急に変わってきたのを、不安な気持で聞いていた。

『ふいに発作でも起して』と、かれは考えた。『厄介なことになってくれなきやいいがな』

「そんな連中のどこへおいでにならなかったのは、そりゃもう非常にけっこうでしたな」委員長はいろいろ思いまどったすえに、言った。

するとこの黒海の英雄の息子は、すらすらとなんの無理もなく、たくみに大切な用件にはいりこんでいった。五十ルーブリ貸してくれと言うのだ。しかし、地方の役所の予算のせまい枠のなかにおしこめられている委員長は、やっと八ルーブリしか出してやれなかった。で、そのほかに、この協同組合で経営している『胃の旧友』食堂の食券を三枚つけてやった。

勇士の息子がその金と食券とを、連銭葦毛（いんせんあしけ）みたいに汚点（しづ）のついた、相当着古した、背広（せびろ）のふかいポケットにしまいこんで、バラ色の絹をはったソファから、腰をあげようとしたときに、扉のむこうにバタバタと足音がし、書記の制止する声が聞えてきた。

扉がパツとあいて、闕（くわ）の上に新しい訪問者の姿があらわれた。

「ここの大將はだれですか？」かれはあらいい息づかいで、目をきよろきよろさせながら聞いた。

「えー、私ですが」執行委員長が答えた。

「いよオ、委員長、こんにちはー」新来の客は、ありったけの声を出して叫び、シャベルみたいに大きな手をぐっとさし出した。「よろしくおねがいしますぞ。」

わたしはシュミット少佐の息子なんで」

「え、なんですって？」いなか町の長官は目をまるくして聞きかえした。

「何人も忘れることのできぬ、かの有名な黒海の勇士シュミット少佐の息子なんですよ」新来の客はくりかえして言った。

「ここにすわっておられる同志も、じつはシュミット少佐のご子息で、ニコライ・シュミットといわれるんですが……」

委員長はすっかりもう面くらって、はじめの訪問者のほうを指した。その人の顔はまるで夢でもみているような表情に変わっていた。

ふたりのペテン師にとっては、まさに危機一髪という瞬間であった。いまや懲罰の剣が、遠慮ふかい、人のいい執行委員長の手のにぎられ、その長い、おそろしい刃が今にもふたりの頭上にきらめこうとしているのだ。ぐずぐずしてはいられない、ただちにふたりは心を合わせてこの事態をきりぬけなければならないのであった。うしろからはいつて来た息子の目には驚愕の色が浮かんでいた。

『パラグワイ』風の夏のルバーシカを着、マドロス風のポケットのついたズボンをはき、青いズツクの靴をはいているかれのようすは、つい一分前までは肩をいからして、さっそうとしていたが、いまはもうへなへなとなつてしまつて、人を威嚇するような元氣も失せ、威厳もすっかり影をひそめてしまつた。執行委員長の顔には、意地の悪い微笑が浮かんできた。

うしろからはいつて来た息子、すっかり觀念のほぞをかため、もう何もかもおしまいだ、委員長の恐ろしい怒りが、いまにもかれの赤毛の頭上に落ちかかつてくるであろうと覺悟したときに、バラ色の絹を張つたソファから救いの声がとんできた。

「よお、ワーシャ」最初に来たシュミット少佐の息子が立ちあがつて叫んだ。「なんだ、おまえか！ おれだよ、兄貴のコーリヤだよ、わからなかったのか？」そしてはじめの息子は、あとから来た息子をしっかりと抱きしめた。

「にいさんかい！」ワーシャのほうでも調子を合わせで、言った。「そうか、にいさんだったのか」

このうれしい邂逅には、むちゃくちゃな愛撫と固い

固い抱擁とがともなつた。だが、あまりきつく抱擁されたために、黒海の勇士の二番め息子のほうは、相手の腕からはなれたとき、まっさおな顔になっていた。兄のニコライのほうも、喜びのあまり、思いきつて強くしめつけてしまつたのだ。

ふたりは抱き合つたまま、横目で委員長のほうをちらりと見た。委員長長の顔からは、まだ酸っぱいような表情が消えていなかった。そこでふたりはなおいっそうコンビを固くする必要にせまられ、さっそく例の一九〇五年の黒海の事件に関するいろんな細かい思い出や、歴史にもつていない新しい挿話などを語りあいはじめた。ふたりはおたがい手ぎりにぎらあつて、椅子に腰をおろし、お道徳的なまなざしを委員長にそそいだまま、さまざまの思い出話にふけつた。

「まったくふしぎなところで会つたもんですよ」最初の息子はわざと感嘆の声をあげ、委員長に向かつてまばたきをして、かれを自分たちの家庭的な喜びの中に引き入れようとした。

「そうですね」委員長はつめたい声で答えた。「しかし、よくあることですよ」